

A・MUSEUM

vol.58
[2009.3.25]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



博物館野外のモウソウチク林に現れたタヌキ（提供：大和田健二）



整備されたモウソウチク林

筍と珍客

春、あちこちの竹林で筍が地面から顔をだします。当館の野外にも竹林があり、毎年たくさんの筍が発生します。3月から4月に発生する筍はモウソウチクです。

モウソウチクは中国原産で、一説によると江戸時代に京都府や鹿児島県、さらに茨城県常総市にも持ち込まれたという記録があります。モウソウチクは日本でみられる竹のなかでもっとも丈が高く、20m以上に達するものもあります。モウソウチクがもたらしてくれるもっとも大きな恵みはおいしい筍です。筍の利用は竹林内の過密化を防ぐなど、美しい竹林の維持にもつながります。この春、ぜひ皆さんもモウソウチクの筍をさがし、春を感じてみてください。

ところで、昨年4月、当館野外のモウソウチク林で筍の成長を調査していたところ、無人の微速度撮影カメラにタヌキが写りました。思いがけない自然の演出に心が和みました。

（教育課 亀山浩二）

開館15周年記念
第45回
企画展

竹展 -しなやかな空間への招待-

Bamboo ! Welcome to the Pliant World

竹展の題字は、竹筆で書かれています(服部仁一 書)

「竹」というと皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。竹細工や竹やぶ、筍、パンダ、かぐや姫のおはなしなどさまざまかと思います。

皆さんのイメージがさまざまであるように、竹は古くからわたしたちの生活と関わりが深い植物です。竹は、成長が早く、軽く、弾力性に富むなど、ほかの植物にはない特徴を持っているため、身近な道具や建材、楽器などの材料として使われ、ときには食用や薬用など、さまざまなかたちで活用されてきました。また、『万葉集』や『源氏物語』のなかにも登場しており、伝統ある日本文化とは切っても切り離すことができません。

今回の企画展では、竹のからだのつくりや生態などを紹介するとともに、竹を人との関わりの面からも取りあげます。そして、竹の良さを肌で感じていただきたいと

思います。展示室に広がる「しなやかな空間」のなかで、竹をお楽しみください。(教育課 亀山浩二)

展示構成

第1部 竹の形態・生態をさぐる

竹をからだのつくりや生活のようすから考えます。

第2部 竹の分布と生育・分類

日本にみられる竹を中心に、標本や生きた実物で紹介합니다。

第3部 竹と生きもの

パンダやシカの剥製、植物の標本などを展示し、竹と関わりのある動物や植物を紹介합니다。

第4部 竹の利用と竹文化

伝統的な竹の利用や茨城の竹工芸などを紹介합니다。

第5部 竹利用の未来に向けて

竹の新しい活用や竹林整備の取り組みなどを紹介합니다。



エジソンの竹フィラメント

キッコウチク

レッサーパンダ (提供: (財) 東京動物園協会)

クワガタとカマキリの竹細工
(提供: 竹原市竹工芸振興協会)

マダケの皮で組まれた沼津垣
(提供: 古平貞夫)

竹繊維スピーカー
(提供: パナソニック エレクトロニックデバイス (株))

会 期 2009年3月14日(土)~2009年6月14日(日)
開館時間 午前9時30分~午後5時まで (入館は午後4時30分まで)
休 館 日 毎週月曜日

※ただし、ゴールデンウィーク期間中の4月29日(水)~5月6日(水)は休まず開館し、5月7日(木)が休館となります。3月30日(月)は開館します。

●観察会&体験イベント
「竹林観察会とタケノコ掘り体験！」

日時: 4月25日(土) 10:00~14:00
場所: 茨城県立中央青年の家(現地集合)
定員: 30名(抽選)
対象: 小学生以上(小学生は保護者同伴)

●企画展記念「竹楽器コンサート~バンブーシンフォニア~」

日時: 5月17日(日) 14:00~16:00
場所: 博物館内
定員: 250名(先着) 対象: どなたでも
出演: OZAN&バンブーシンフォニア

スクールミュージアムが目指すもの ～スクールミュージアム活動紹介4～

連載最終回の今号ではスクールミュージアムが目指す姿を考えてみます。平成17年度に立ち上げたスクールミュージアムは、身近な自然に対する確かな知識をもった人材の育成、学校と博物館の協力体制の強化による教育効果の向上、茨城県の豊かな自然の調査と保護、博物館と学校や関係協力団体とのネットワーク化の深まりの4つの目標を掲げ、子どもたちが自然と接する機会を増やしたいと考えました。

これまでスクールミュージアムを設置した8つの学校は、周囲の環境も設置期間も異なります。最初からの参加校では、4年間の活動のなかで、それぞれのミニ博物館が充実してきました。そのなかでも保護者が運営をサポートした大谷小学校、講師派遣を積極的に活用し成果をあげた大形小学校は、独自のカラーをだしている学校といえるでしょう。

スクールミュージアムは、内容が多岐に渡り、長期的な視野に立った地道な活動が必要なため、現時点では、当初掲げた4つの目標がすべて達成できたとは言えないかもしれません。しかし、これはスクールミュージアムの効果が低いということではありません。なぜなら、学校と当館、そして地域の方々の取り組みのひとつひとつが、子どもたちの血となり肉となり、将来、大きく開花することになると信じるからです。スクールミュージアムづくりにたずさわるすべての人たちに次の言葉を贈り、スクールミュージアムが目指すものの答えにしたいと思います。

"Nature does nothing in vain"

(自然界には無駄なものはない)

○美浦村立大谷小学校

霞ヶ浦に近い台地にある大谷小学校は、豊かな田園地帯のなかにある学校です。スクールミュージアムクラブがあり、自分たちで集めた標本が増えてきました。地域の方々に感謝するために開催する大谷交流祭では、

当館からのブースも展示します。設置時から、たくさんの方々のサポートに協力いただいています。



大谷小でスクールミュージアム・サポーターと懇談するようす

○下妻市立大形小学校

鬼怒川の堤防に接する大形小学校は、筑波山がよくみえる平野のなかにあります。各学年とも、季節の変わり目ごとに植物や昆虫の観察を学芸員と続けています。2006年の授業では、まだ数が少なかったツマグロヒョウモンを採集し、分布拡大を探る貴重なデータも記録できました。今年度は、博物館と連携した生活科や理科の授業を他の学校の先生に公開しました。楽しく行われた授業は好評でした。(資料課 久松正樹)



大形小学校で行った季節の生きもののお出前授業

西山荘

雨に煙る西山荘を訪れた。

右手に孟宗竹林、左手に熊野杉を望む趣のある通用門をくぐり、坂を上がると茶色の土壁が印象的な萱葺きの小さな家屋があった。光圀公が藩主を退き、「大日本史編纂」に心血を注ぎ亡くなるまでの10年間を過ごされた西山荘である。

35万石の大藩である水戸藩2代目藩主引退後の住居は、わたしが想像したものとは大変違ったものであった。玄関そして控の間、寢所などを

合わせても20坪程度であろうか。ガイドブックによれば1691年に建てられ、1817年に野火により焼失し、その2年後に規模を縮小し再建されたとのことである。

真冬の見学であったため、障子越しにみる部屋での光圀公の生活はさぞかし寒かったのではと思えたが、自然の中に凛と佇むその家屋は華美・装飾を嫌った光圀公の信条を反映する風格漂う住まいである。邸内にはご文庫もあり、その火事等の防災

コラム by director SUGAYA

に配慮した立派な造りに、更に思いのこもった心字池は文人としての光圀公の見識の高さを示すものと感じた。隣接する守護宅が現在保存修理で工事中のため、完成後に再度訪れたいと思っている。



イラスト：尾花明子

南ドイツの隕石孔と岩石に残る衝撃

研究ノート1

小天体の衝突というと、恐竜絶滅の引き金になったとされているチクシュルーブ隕石孔（メキシコ）が有名ですが、もし今、直径1kmを超える小天体が地球に落下してきたら、どのようなことが起こるのでしょうか。

ドイツ南部に位置するネルトリンゲン^{じょうかくとし}は中世ヨーロッパ時代に形成された円形の城郭都市で、“ロマンチック街道”をたどる多くの観光客が訪れる美しい街です。この街の中心部にある教会の塔を89.9mの最上部までのぼってみると、眼下に街を取り囲む円形の城郭がみえますが、そのはるか遠方をよくみると、同じような高さの丘陵^{きゅうりゅう}に取り囲まれているのがわかります。この丘陵は隕石孔の内壁で、このネルトリンゲンは直径約24kmの“リース隕石孔”のなかにある街なのです。

リース隕石孔は約1450万年前に直径1.5kmほどの小天体が落下してできたと考えられています。隕石孔周辺の岩石のなかには、当時の衝撃が記録されていますので、私の調査からその話題をいくつか紹介します。

○超高压でダイヤモンドが生じたスエバイト

スエバイトは、小天体が衝突したときの衝撃で地表の岩石が瞬間的に超高温、超高压になり、融けてガラス質になったものや細かく砕けた岩片などが、高温のガスとともに流れて隕石孔の内外で堆積したものです。



リース隕石孔のなかにあるネルトリンゲン(ドイツ)
(はるか遠方には隕石孔の内壁がみえる)

火山噴火で生じる火砕流^{かさいりゅう}に似た見かけをしています。スエバイトにはダイヤモンドやコース石などの超高压のもとで生じた鉱物が伴われています。採石場では、地表の岩石が激しい衝撃でバラバラに破壊され、吹き飛ばされてきた角礫岩^{かくれきがん}（褐色部）のうえに、スエバイト（白色部）が厚く降り積もったことがわかります。

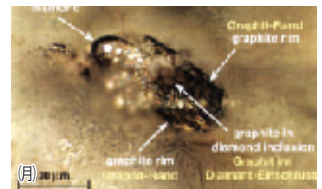
○衝撃で輪切りされた化石

隕石孔周辺に分布していた石灰岩^{せっかいがん}は、衝撃によって地層がめくれてひっくり返り、岩石そのものも衝撃で一定の方向に割れ目が生じています。この石灰岩に含まれていた化石も一緒に変形したため、まるで輪切りにしたような独特の姿で見つかります。

○岩石が蒸発してできたモルダバイト

小天体の衝突時には地表の岩石は一部で5,000℃を超え、瞬間的に蒸発しました。このガスは大気中で凝縮して深緑色のガラスとなり、東方260~400kmも離れたチェコ付近に降り注いだと考えられています。このガラスは“モルダバイト”の名で知られています。

日本でも、長野県^{しやうげきけん}で衝撃痕をもつ鉱物がみつき、隕石孔であることが確認されています。もっと大きな隕石孔をつくる小天体が落ちてきたら、地球の環境は激変してしまうかもしれません。(資料課 小池 渉)



激しい衝撃で生じたもの。(a)スエバイト、(b)スエバイト中のダイヤモンド、(c)変形したベレムナイト化石、(d)モルダバイト。

春を告げる花

冷たい空気の合間に、暖かい風が博物館の野外を通り過ぎる。春はもう目の前まで来ています。

花の谷にあるソメイヨシノ^{つぼみ}の蕾が薄桃色に膨らみはじめた頃、その向かい側には、純白の大きな花が浮き立つように咲き誇ります。コブシです。

コブシはモクレン科の植物で、花はとてもよい香りがします。古人はこの花の開花時期から農作業のタイミングを判断したり、花の向きから

豊作を占ったりしたそうです。また、蕾が開く直前の形、あるいは果実が“にぎりこぶし”に似ていることから、「こぶし」と名づけられたといわれています。モクレン科の花々の歴史は古く、一億年以上前から現在と同じような形だったと言われ、白亜紀の地層から化石が発掘されています。白亜紀の森にも、このような花が咲き乱れ、その香りに包まれて、恐竜たちも春を感じていたのかもしれない。ぜひ、皆さんも野外で春

の訪れを体感してみてください。

(ミュージアムコンパニオン 小磯慧里子)



コブシ

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

GPSでツキノワグマの生活を追う

研究ノート2

皆さんは、GPS（Global Positioning System：地球測位システム）をご存じでしょうか。カーナビなどで使われている、人工衛星を利用した位置情報の測位システムのことで、24時間、どんな天候でも自分のいる位置を知ることができます。このシステムが、1990年代後半位から、野生動物の生態調査に利用されるようになりました。それまでは、VHFテレメトリー法という、電波発信機からの音源を頼りに動物を追跡する方法が主流でしたが、追跡は体力勝負のところがあり、さらに位置誤差の問題も付きまといました。幸いなことに、野生動物用GPS機材は、2000年代に入ると小型化が進み、私たちは、2000年から日本でも最初にGPS機材の導入を行い、ツキノワグマの生態調査への応用を試みはじめました。

新しい機材ということもあり、ツキノワグマへの装着では、幾度となく失敗しましたが、最近では安定して動作させることが可能になりました。これまでに、東京都の奥多摩町と、栃木県の日光市で40頭近くのツキノワグマを捕獲して、GPS首輪を取り付け、その生態に関する多くの新しい知見を得ています。例えば、ツキノワグマの生活パターンは夜明けと夕方にピークをもつ昼行性であることや、冬眠前の秋期には夜にも活動

が広がるようになり一日の活動時間が増えること、1歳の子どもの活動は成獣よりも活発でそれにつられて母親も普段より動き回らざるを得ないこと、秋の実りが悪い時はエサ探しを早々と諦めて冬眠に入ってしまうこと等々、これまでには知り得なかったツキノワグマの生活が明らかになってきています。昨年、これらの研究結果を4本の国内外の学術雑誌に発表しました。研究は今後も続けていきますので、さらに興味深い事実が得られることと思います。（教育課 山崎晃司）

※山崎首席学芸員は、この研究により平成21年3月に博士（農学）の学位を取得しました。



GPS首輪の初期化とセッティング。パソコンの専用ソフトウェアによって測位スケジュールなどさまざまな設定が可能になっている。



ツキノワグマの計測の様子。生け捕りしたツキノワグマは、GPS首輪を装着する前に体計測、血液や体毛などの採取を行う。写真は体脂肪値を計測しているところ。



GPS首輪を装着されたオスのツキノワグマ。首輪の重量は550gで、クマの生活をできるだけ妨げないようにしている。首輪は1年後に自動で脱落するようになっている。

コイ

コイと言えば、鯉こいのぼり、鯉こくなど、私たち日本人の文化に古くから深い関わりがあります。当館のすぐ目の前にある菅生沼でも毎年春になると、コイが沼の水際に集まり、数尾の雄おんが1尾の雌めいを追いかける繁殖行動がよくみられます。

この私たちの身近にいるコイですが、皆さんは、日本に生息するコイには、体高の低い「野生型」と、体高の高い「飼育型」の2つのタイプがあることをご存じでしょうか。こ

の形態の違いは昔から知られていましたが、最近の遺伝子研究で、「野生型」が日本在来の系統、「飼育型」が国外から移入された系統であることが明らかにされつつあります。今後、コイはこのように分けられる可能性が出てきているようです。

関東平野には、野生型と飼育型のコイが分布し、利根川でもその生息が確認されています。菅生沼は利根川と下流で繋がっているため、ここに生息するコイが一体どちらに該当

おさかな通信

するのが気になるところです。

皆さんも、この春菅生沼に足を運んでみてはいかがでしょうか。

（水系担当 石坂泰敏）



コイ

長尾英幸コレクションが寄贈されました

収藏品紹介

このコレクションは、長尾英幸氏が1989～2007年にわたり収集した子のう菌というグループを中心とする菌類標本です。寄贈された1805点の標本は、西表島や小笠原諸島などの国内の標本のほか、カナダなど外国の標本もふくんでいます。そのなかで、植物に病気を起こす植物寄生菌のなかまの、ヤブツバキ膨葉硬化病菌（担子菌のなかま）の標本は、命名の基準となったタイプ標本に指定されています。他にも日本ではじめて確認されたウスベニコップタケや、絶滅危惧Ⅰ類に指定されており世界で4例しか確認されていないキノミタケなど、大変貴重なものもあります。

子のう菌類は、世界で33,000種類が知られ、真菌類のなかで最大のグループです。茶わんのような形のチャワンタケや網目模様のアミガサタケのような比較的大きなキノコをつくるものだけでなく、動物に寄生する冬虫夏草や植物に寄生するうどんこ病菌などがふくまれます。その分布は、高山や極地圏、さらに水中にまで広がり、形や生活のしかたも実にさまざまです。

長尾氏は東京都出身で、東北大学大学院を修了後、フランス政府給費留学生としてパリ大学で菌類遺伝学を学ばれました。千葉大学助手、筑波大学講師、(独)生物資源研究所研究員を経て、現在はマレーシア科学大学准教授として教鞭をとられています。そして、マレ

一半島の熱帯林の生物多様性調査や、アジアゾウの糞生菌などの研究をされています。

当館では、寄贈された標本を「長尾英幸菌類コレクション」として昨年从今年2月まで、トピックス展示で紹介しました。肉眼でやっと思えるとても小さな標本もありますが、その一つ一つが多様な菌類の姿を記録する貴重なものです。今後は多くの方に菌類への理解を深めてもらえるように、このコレクションを活用していきたいと思っています。（資料課 小松崎 茂）



調査中の長尾英幸氏



ヤブツバキ膨葉硬化病菌



長尾英幸コレクションの収蔵状況



ウスベニコップタケ

黄砂の飛来

季節の話題

黄砂現象とは、東アジアの砂漠域（ゴビ砂漠、タクラマカン砂漠など）や黄土土地帯から強風により大気中に舞い上がった黄砂粒子が浮遊しながら降下する現象をいいます。日本では、春に観測されることが多く、ときには空が黄褐色に煙ることがあります。

黄砂現象発生の有無や黄砂の飛来量は、発生域の強風の程度に加えて、地表面の状態（植生、積雪の有無、土壌水分量、地表面の土壌粒径など）や上空の風の状態によって大きく左右されます。黄砂粒子はいったん大気中に舞い上がると、比較的大きな粒子（粒径が10 μm以上）は重力によって速やかに落下しますが、小さな粒子（粒径が数 μm以下）は上空の風によって遠くまで運ばれます。東アジアが起源の黄砂粒子が太平洋を横断し、北米やグリーンランドにまで到達した例も報告されています。

今年の日本への黄砂の飛来は、2月11日昼過ぎに長崎県厳原町を皮切りに、三重県までの西日本各地で観測されています。徳島市では2月11日夜に黄砂が観測され、12日朝は視界が7kmに落ち、街の景色がかすんだということです。これは、昨年より21日早く、過去10年間でもっとも早い時期の観測となりました。

黄砂現象は、近年その頻度が増し、視界が悪くなるばかりではなく健康への影響も指摘されるなど、被害が大きくなってきています。急速に広がりつつある過放牧や草原の農地への過剰な転換など、黄砂は単なる自然現象ではなく、森林減少、土地の乾燥・砂漠化といった人為的影響による側面をもった環境問題としての認識も高まっています。

日本で濃い黄砂を観測、または予測した場合には、気象情報として発表されることがありますので確認してみてください。（資料課 永瀬卓也）



黄砂（内蒙古自治区フフホト市）

トピックス

○特別展記念シンポジウム

1月31日（土）に特別展示「いばらきの自然を語る」を記念したシンポジウム「茨城のナチュラリストに聞く」を開催しました。当日は悪天候にも関わらず、119名という多くのお客様にご参加いただきました。茨城の自然史研究に長年たずさわりの基礎を築いてこられた地元の研究者6名に、研究をはじめたきっかけや自然史研究にかけてきた思いなど、これまでのご自身の研究について語っていただきました。講演のなかでは、ヒヌマイトトンボの発見にまつわる秘話や昨年話題になった日本最古の地層などについての話もありました。また、総合討論では、会場の皆さまからいただいたご意見をもとに活発なディスカッションが交わされました。何のために自然史研究をするのかという問いにはじまり、自然史研究と開発との関わり、自然史研究の輪を広げるために必要なこと、博物館に期待することなど、さまざまな視点から今後の茨城の自然史研究のあり方について有意義な語らいができました。6名の先生方や一般の方々からいただいたご意見は、今後の博物館運営に生かしていきたいと思っています。

（資料課 池澤広美）



ヒヌマイトトンボについて語る小菅次男氏

○盲学校で移動博物館

1月28日（水）に茨城県立盲学校（水戸市）で移動博物館を開催しました。

動物のはく製や毛皮、恐竜の化石、昆虫やタネの拡大模型、香りのする植物など、博物館からトラック1台分の展示物を運び込み、盲学校のプレイルームが1日限定のミニ博物館に変身しました。

当日は盲学校の児童生徒やその保護者、近所の幼稚園園児など約80名が会場を訪れました。展示物は、さわって・聞いて・おいをかいて、いろいろな感覚を使って楽しむことができるハンズオン資料です。来場者それぞれが、標本をすみずみまでさわったり、ほおずりをしたり、自分の体の大きさと比べたりと、思い思いの方法で動植物の形や大きさ、手触りなどの特徴を確かめ、多くの驚きや発見をしていたようでした。は

じめはおそるおそる展示物に手を伸ばしていた子どもたちも、たくさんの標本にふれるうちに笑顔があふれ、積極的に質問をしている姿もありました。

博物館では少しでも多くの方々に展示を楽しんでいただけるよう、今後もこのような機会を提供していきたいと考えています。（企画課 佐川三輪子）



はく製に手を伸ばす児童

○自然観察会「菅生沼のコハクチョウと冬鳥たち」

この観察会は、2月11日（水）に菅生沼の通称上沼とよばれるところで開催しました。ここは、コハクチョウが周辺でみられる観察ポイントで、約4.4kmの菅生沼遊歩道があり、上空を滑空するオオタカや林のなかの小鳥もみつけることができます。博物館前からの景観とはひと味違う景色が広がっています。

野鳥観察についてのレクチャーのあと、上沼で私たちを出迎えてくれたのは、300羽ほどのコハクチョウと500羽を超えるカモ類です。ボランティアの方々を用意してくれた望遠鏡でみると、コハクチョウ、カモ類それぞれのなかでも羽の模様、くちばしの形態や色に違いがあることがよくわかりました。オナガガモやマガモの群れにまじり、くちばしが平らなハシビロガモもみつけることができました。遊歩道を川沿いに行くと、カシラダカやシメ、アトリなどの冬の小鳥たちが姿を現し、また、大木にはノスリが悠然ととまり、私たちの目を楽しませてくれました。約2時間の観察会で合計39種もの野鳥を観察できました。（教育課 伊藤 誠）



レクチャーをきく参加者

観察会でみられたコハクチョウ

博物館からの桜便り



花の谷に咲き誇るソメイヨシノ

全国各地には、その華やかさなどから桜の名所といわれる場所がたくさんありますが、博物館にもそれらにひけをとらない桜のスポットが2か所あります。さまざまな花が私たちの目を楽しませてくれる「花の谷」と、貝化石掘り体験もできる「古代の広場」です。

花の谷には、樹高10mを超えるソメイヨシノが並木になっています。この桜並木は、もともと隣接する皇産霊神社の参道の並木としてあったものです。3月下旬にトンボの池のほとりから見上げると、右手にピンクの桜、左手に純白のコブシが咲き誇り、見事な「花の谷」を演出しています。また、4月にはネモフィラ、スイセンなどが次々と開花して花の谷に彩りを添えます。

古代の広場には、広場の外周を取り囲むようにソメイヨシノがあります。満開に咲き誇る桜とともに、この時期に多くなる野鳥のさえずりにつつまれ、とても幸せな気分になります。

ぜひ、一度博物館の桜のスポットを訪れてみてください。また次の年も見たくなるようなすばらしい桜をご覧ください。（企画課 尾花義幸）

編集後記

竹には謎がいっぱいあります。そのひとつが開花の周期です。一説によるとその周期は60年とか120年とかいわれていますが、実際はいつ咲くのかわからず謎につつまれているそうです。開花後はほとんどの竹が枯れてしましますが、数年で再生する竹林もあるようです。第45回企画展で竹の謎にふれてみてください。（Y.O.）

【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、
愛宕駅下車～茨城急行バス
「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

| 区分 | 本館・野外施設 | | 野外施設のみ | 年間パスポート |
|--------|----------------|----------------|----------------|---------|
| | 企画展開催時 | 通常時 | | |
| 大人 | 720円 (580円) | 520円 (420円) | 200円 (100円) | 1,500円 |
| 高校・大学生 | 440円 (300円) | 320円 (200円) | 100円 (50円) | 1,000円 |
| 小・中学生 | 140円 (70円) | 100円 (50円) | 50円 (30円) | 300円 |

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

●毎週月曜日
※3月30日(月)は開館し、振替休館日はありません。
※ゴールデンウィーク中の4月29日(水)～5月6日(水)は休まず開館し、5月7日(木)が休館となります。
※6月22日(月)～6月27日(土)は館内整理のため休館となります。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2009年3月25日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。